カトリシズムにみる公共宗教性と救済宗教性

――現代アルゼンチンの事例から――

早稲田大学　　渡部奈々

1　目的

この報告の目的は、現代アルゼンチンにおけるカトリック教会の公共宗教性と救済宗教性の特色を明らかにすることである。具体的には、①カトリック教会が国家宗教から公共宗教へと変容した歴史的経緯を分析し、②公共宗教としての実践を考察する。さらに、近年カトリック教会が推進している③カリスマ刷新運動に焦点を当て、一般の公共宗教論に欠如しているカトリシズムの救済宗教性を明らかにする。

2　方法

まず、カトリック教会が公共的役割を担う契機となった「アルゼンチンの対話」を取り上げ、その特徴を明らかにする。次に、近年アルゼンチンで深刻化する麻薬問題に対する教会の取り組みに注目し、司教団がイニシアティブをとる組織的な活動と、スラム司祭による草の根支援活動という異なる次元における公共宗教性を考察する。また、よりミクロな次元である個人の信仰実践に目を向け、カトリシズムの救済宗教性を探る。カリスマ刷新運動の主軸となっているカリスマミサでは、超自然的な癒しの実践が行われており、自分や家族の薬物依存症からの回復を求めてミサに参加する信徒が少なくない。

データとしては、文献とフィールド調査が中心となる。アルゼンチンカトリック教会の司教団、各評議会、司祭グループが発表した声明や文書、アルゼンチン政府による公文書などの一次資料に加えて、新聞・機関誌記事等を用いる。また、2006、2007、2016、2017 年に行ったフィールド調査（参与観察、インタビュー、質問紙調査等）から、カトリシズムの公共宗教性と救済宗教性を考察する。

3　結果

分析の結果、 アルゼンチンカトリック教会には教会組織レベルと草の根レベルの公共宗教性が存在することが明らかになった。特に麻薬問題に対しては、教会組織全体としての撲滅運動と共に、スラム司祭らによる依存症者とその家族への支援活動が広がりをみせている。また同時に、依存症からの超自然的な癒しを求める個人にとって、カトリシズムは非常に私的な救済宗教としての役割を果たしていることが今回の調査から明らかになった。

4　結論

宗教が近代の市民社会で影響力をもつ公的存在感を維持するためには、文化的伝統のみならず、私的な救済宗教としてのダイナミックな側面が不可欠となるとカサノヴァは述べているが、現代アルゼンチン社会においてカトリシズムはその両面―公共宗教性と救済宗教性―を有しているといえる。

文献

カサノヴァ，ホセ．1997．近代世界の公共宗教』津城寛文訳,玉川大学出版部

渡部奈々.2013.「アルゼンチンで深刻化する麻薬問題とスラム司祭の取り組み」『ラテンアメリカレポート』Vol. 30, 53-62

Ameigeiras, Aldo. 2014. *¿Política y catolicismo o catolicismos políticos? Miradas y perspectivas sobre una relación conflictiva en la Argentina.* Buenos Aires, Universidad Nacional de General Sarmiento.

Sueiro, Víctor. 2014. *Curas sanadores y otros asombros.* Buenos Aires, Planeta.